唐長安城大明宮太液池の共同発掘調査

当研究所は従来から中国社会科学院考古研究所と共同で日中都城の比較研究をすすめており、2001年度からは、5ヶ年計画で唐長安城大明宮太液池の共同調査をおこなっている。

大明宮は現在の陝西省西安市にあり、明代に築かれた城壁の北方に位置する。中国唐(618～907)時代の都長安城の東北にあたり、634年に造営が始まり後に政治の中心となった宮殿である。宮殿内はおおきく南北にわかれ、主として南半が政治の場で、その中心が含元殿で、現在その壮大な基壇が復原整備されている。北半が主として居住の場で、その中心にあった巨大な池が太液池で、『旧唐書』などにその記述があるが、現在は池にあった蓬莱島の高まりのみが池の面影を残している。共同調査に先行する1998年から中国社会科学院考古研究所がボーリング調査をおこない、池の範囲をほぼ確定しており、2001年度から本格的な発掘調査を開始した。

2002年度末から2003年度春にかけては、蓬莱島南岸と、西側の中島と池北岸の発掘調査がおこなわれ、これら発掘成果についてはすでに中国において調査概要が報告されている(「唐長安城大明宮太液池遺址考古新収穫」『考古』2003年11期、中国社会科学院考古研究所)。蓬莱島南岸の発掘区では、島内を南北に走る道路状遺構、その脇に磚や石で組まれた池状遺構、敷石遺構、建物の礎石や景石が検出された。西側の発掘区では、西側の中島と池北岸間で、平面がV字形で、池を跨ぐ独特な構造をもつと考えられる建物遺構が検出され、太液池の具体的構造が次第に明らかになっている。

2003年10月からは、池南岸の建物遺構の発掘調査を開始し、2004年春を目処に調査を続行中である。

今年度は発掘調査とともに、出土遺物の共同調査をおこなった。出土遺物は金属製品、陶磁器、瓦磚、建築石材等で、中国社会科学院考古研究所西安研究室に保管されている。同研究室において共同で遺物調査を実施し、詳細な検討とともに意見交換をおこなった。次年度以降も同様な共同作業を継続し、共同研究もさらに充実させる予定である。

(島田敏男)

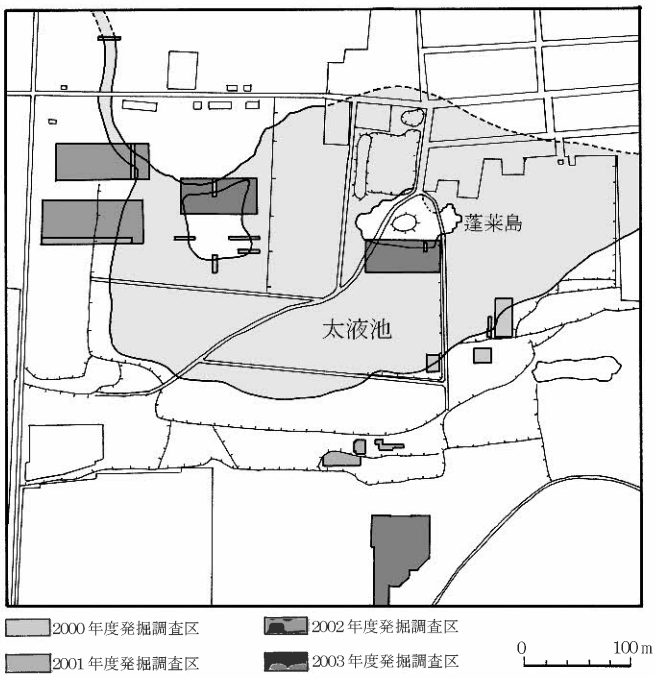

図1　唐長安城大明宮太液池発掘調査区位置図

図2　蓬莱島(中国社会科学院考古研究所撮影)

図3　太液池北岸と西の中島間の建物遺構(中国社会科学院考古研究所撮影)